札　幌　大　学

法学部自治行政学科開設記念「まちづくり懸賞論文」

『住めたらいいな･･･、こんなまち！』

佳　　作

【論文テーマ】

住めたらいいな･･･こんなまち！

【応募者】

北海道岩見沢農業高等学校

吉田　尚樹さん　　(３年)

平成 18 年 10 月

北海道岩見沢農業高等学校　３年
吉田　尚樹

私は北海道に生まれ、小さな頃から自然に囲まれた中で育ちました。家が農家ということもあり、農作業の手伝いや畑を走り回ったりしたことは今でもはっきりと覚えています。そして、私は学校で様々なことを学習するにつれ、北海道という地をさらに好きになっていきました。農業生産、水産業など第一次産業が活発であり、特産品が多く、食料自給率は他の地域を上回っています。また、自然豊かで四季の変化も美しく、国内外から多くの注目を集めています。このように、他の地域には真似できない特色がたくさんあり、私は、北海道に生まれたことを誇りに思っています。

しかし、北海道を含め国内では様々な問題が明らかになっており、今後の私たちの生活に大きな影響を与えると予想されています。その中でも、私が重要だと考えているのは介護福祉の必要性、食料自給率の低下及び農業の衰退、化石燃料の使用による環境汚染の三つです。特に化石燃料は現在、価格高騰などが発生しており、また、このままでは確実に化石燃料がそこをついてしまうという事実もあるために、長期的な利用計画をたてることは不可欠。そこで、これからは国内外で「脱・化石燃料」をテーマに、環境と調和の取れたエネルギー生産、消費を行っていかなければなりません。しかし、環境に負担の少ない自然エネルギー発電は発電量自体が少なく、原子力発電に頼らざるをえないのが現状です。今後の生活には必要不可欠なものであり、負担も大きくなってしまいますが、そのためにも安全性を向上させ、惨事を事前に防がなければなりませんが、それでも人々の不安が消えることはないでしょう。

そこで、新エネルギー技術の開発や普及を広めていく必要があります。全エネルギー消費に対する割合を上げ、原子力の負担を軽減させることで、人々の不安も大きく解消されるものだと思います。私は、学校で自然エネルギーの研究をしていたということもあり、自然エネルギーの利用は、今後の生活において大きな役割を持つことを学びました。私が研究していた木質バイオマスの利用は、間伐による山林の健全化やカーボンニュートラルによる二酸化炭素抑制など多くの利点があります。さらに、木質バイオマスを活用したチップボイラーにより、温水と雪氷水の温度差による「温度差発電」という発電方法もあり

ます。これは、風力や太陽光といった発電施設よりも小規模に抑えることができ、経済性も評価できます。さらに、実行には移せませんでしたが、私は工夫次第では木質バイオマスを利用しなくても温泉と雪氷水といった地域の特色を生かした発電方法も実現することができると考えます。それが実現すれば木質バイオマスを利用した施設より経済性がよく、火を用いないため安全性も向上するでしょう。このように、自然エネルギーはアイディア次第で様々な応用が利くと考えられます。

研究次第では、その自然エネルギーを農業生産に生かすことも可能になります。近代農業は研究者の努力もあり、大きく発展してきました。しかし、それには様々な弊害が伴っており、特に機械化が進んだ背景には、化石燃料の消費や農業機械からの排出ガスによる大気汚染など課題が残っています。そこに、自然エネルギーを活用することができれば、今の時代に必要である「環境と調和の取れた生活」に近づけるでしょう。環境に優しい持続可能な農業を促進することにより、農業生産自体の改善に直結すると考えられます。長期的な農業の発展を見据えると農業後継者の育成やかんがい排水施設の強化などが挙げられますが、そのためにも自然エネルギー技術の開発が最重要であると考えます。

現在、国内では国外からの輸入農産物が影響し、食料自給率の低下が国内農業の発展を抑制してしまっているのが現状です。今後、文化水準の向上している中国やインドも輸入量を増加することが予想され、このままでは国外の農産物を輸入国同士で競争することになるでしょう。私は、そのような事態を回避し、食料の安定した供給のためには「地産地消」を全国規模で広めていく必要があると考えます。食料自給率を上昇させるためには、国外からの輸入量を最小限に抑え、国産農産物を国内での流通を促していくことが必要でありますが、残留農薬など有害なものが付着している国外の農産物に比べれば、国内の農産物の貴重さを実感してもらえるでしょう。消費者が安全で安心できる農産物を手に入れるためには、国産農産物を消費すればいいという簡単なことなのです。

今後、少子高齢化が進行していくという現状は、日本の未来の大きな不安材料になっています。平均寿命の増加により、海外から和食文化が注目されるなど自他が認める「長寿世界一の国」に発達しましたが、人口ピラミッドのバランスが偏ってきており、介護福祉の充実は必要不可欠なものになっています。そこで、高齢者にも住みやすい街づくりが今後、各地で推進されることが予想できます。私の住んでいる栗山町は介護施設が充実しており、他の市町村のモデルにもなっています。私自身、栗山を知らない人に町のことを説

明する時に介護福祉のことを紹介することができ、町民にとっても誇れることであります。また、国内でも珍しい地域通貨の導入など、様々な試みが行われています。私も経験したことがありますが、地域通貨の利点は、利用することでお互いに助け合いながら人とのつながりを深めることができることや、高齢者は支払う分に加え、自分の知識を伝えることで地域の歴史や文化も継承することができることです。一般的なボランティアでは経験できないようなことも貴重な経験でき、この制度は地域の活性化だけでなく伝統を引き継ぐ手段にもなっていくことが期待されます。さらに、栗山町では環境保全に関する取り組みのモデル地区に選ばれている「ハサンベツ里山計画」というものが実行されており、今の森に失われた古き良き時代の森、生態系を復活させようという活動がされています。私も小さな頃に森の中で遊んでいた思い出もあり、健康な森の創造は子供の遊び場になり、高齢者にとっても森林浴の場所になることでしょう。森林浴には人の気分を明るくさせる効果や血圧を安定させるなど、健康面でも非常に良いという話も聞き、他の市町村でも着手していない森林を整備することで健康の促進にもつながると考えられます。

以上のことから考える私が考える「住みやすい街」とは、今は失われてしまった数十年前の生活を再び復活させ、そこに現在の技術を導入することで生まれるものです。説明すると、都市とは別に山林のふもとに新たな居住空間を創造し、人を移住することから始まります。そこでは、クリーンな自然エネルギーが利用され、木質バイオマスを山林から間伐材として用い、エネルギーとして活用します。そのエネルギーを利用することで農業の活性化にもつながります。間伐により、山林や人々の健康が保たれ、また、森林浴により障害を持った人の意識改善にも影響します。さらに、その地域ではすべての通貨を地域通貨とし、完全に都市とは別離した生活となります。その理由としては、「地産地消」の促進や人々の交流を最優先し、地域独自の小さな組織、いわば家族のような集団を目指すことが最も重要と考えるためです。自然と農業と人とが共生する里山、ふるさとの森として再生、創出していくことを自然の復元に任せるのではなく住民が主体となり、知恵と労力を出し合って人の手を加え、里山作りを進めていきます。また、独自の文化を営むことにより、都市との交流も生まれるでしょう。里山体験として、森林浴や里における文化活動を体験してもらうことや、長期的な交流として里に滞在して農業や芸術活動に力を入れてもらうことも計画されると思います。そして、そのような文化、芸術活動から製作された産物を地域の産業とし、非営利組織として全国に発信することで全国各地に展開し、人々に

環境に対する関心を深めてもらう新たな事業として活動できると考えられます。それが、個人の環境保全に対する意識改善につながり、資源やエネルギーの省力化の躍進が期待されます。

　これが、私の考える理想の街づくりでありますが、すべてを実行できるとは思いません。しかし、今の時代にどの街にも必要なことは、自分の住んでいる街をどれだけ愛することができるかだと考えます。人々の交流が盛んで、心癒され、愛せる街に住むことはとても困難なことですが、そのような街が増えれば人々の心も豊かになることでしょう。